

経営協議会での意見等への本学の取組状況

平成 25 年 6 月現在

学外委員からの意見	熊本大学の取組状況
<p><b>【熊本大学の使命・目標について】</b></p> <p>① 「熊本大学のあるべき像」というものを構築してほしい。自主性を持ち、特色ある熊本大学をどのように確立するかということかと思う。</p> <p>② 熊本という地域に熊本大学があるだけでその存在価値があるといった明確な目標を掲げるべきである。</p>	<p><b>① 熊大力強化(ブランディング)戦略への取組</b></p> <p>「国立大学法人熊本大学の将来像(15.3.26)」を踏まえて新たな大学像を構築するに当たり、本学が蓄積してきた資産、教育研究活動等に対する社会的評価及び価値認識(ブランド力)を高め、本学の理念・根源的な特質(コアバリュー)を社会に広く訴えるために、本学固有のブランド力資源等を踏まえた根源的価値をモデル化して整理するとともに、それらを集約したコミュニケーションワード「創造する森 挑戦する炎」を平成25年3月に策定した。整理したモデルを基に、本学の政策課題への展開を考えている。</p> <p><b>② 地域社会との連携充実への取組</b></p> <p>地域社会からの要請を的確に把握し、研究成果の公表、人的交流、諸施設の開放等を通して、産業創成、地域経済振興、教育面における社会サービスの充実を図り地域に開かれた大学の役割を果たすため、「地域社会との組織的な連携の強化」「地域社会の課題解決への貢献」「大学の生涯学習機能の強化」「産学連携・産業振興への貢献」の4つの基本方針を柱として、『熊本大学と地域社会との連携に係る基本方針』を平成 25 年 1 月に策定した。</p>
<p><b>【入学試験制度について】</b></p> <p>① 質の高い学生を確保する工夫が必要ではないか。</p>	<p><b>① 入試改革への取組</b></p> <p>質の高い学生を確保するため、平成 26 年度入試以降、次の改善を行うこととしている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○理学部で、センター試験を課さない「推薦入試 I」を廃止し、前期日程と後期日程に振り分けて募集する。</li> <li>○医学科の前期日程において、面接を課す。</li> <li>○グローバル化に対応した学生を確保するため、理学部前期日程及び工学部物質生命化学科、社会環境工学科の前期日程の個別学力試験に外国語(英語)を課す。</li> </ul> <p>また、平成24年度に入試改革WGを立ち上げ、本学における現行入試の問題点や改革案について「中間まとめ」を報告し、全学の「入学試験検討会議」において検討を開始した。</p>

<p><b>【教育の充実について】</b></p> <p>① 多様な人材を育成するために、学生の基礎学力の向上について考えてほしい。</p> <p>② 英語教育等の基礎教育に力を入れる一方で、厳しい状況にある現代社会に耐えられる人材をどのように育てるのかといった熊本大学独自の施策を打ち出すことが重要である。</p>	<p><b>①～② リベラルアーツ強化への取組</b></p> <p>副学長(教育・学生支援担当)を中心として、全学的な教学マネジメントのもとに、共通基盤教育の実施体制の整備検討を行い、さらに平成 25 年 4 月に副学長の諮問会議として「教育改革戦略会議」を立ち上げて検討体制を強化した。</p> <p>まず、第一に、First Year Experience(初年次第 1 セメスター10 単位の語学・リベラルアーツ教育)の構築により、多様性・異文化理解力、批判的思考力を涵養するとともに、高大接続・転換教育を行うことを最重要課題として、新たな共通基盤教育の平成 26 年4月からの導入を目指している。</p> <p>また、21 世紀におけるグローバル化の著しい進展、産業構造の大きな変動の中で、単に基礎知識や専門知識のみを教授するだけでなく、養成する人材像を明確にしたうえで、社会人基礎力(前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力) 育成に注視した取り組みを開始している。</p> <p>平成 25 年度入学生から、英語運用力の重要性を意識させ、また継続的な学習への動機づけとするため、TOEIC-IP テストを入学直後と 2 年次後学期に実施することを決定した。</p>
<p><b>【ファカルティ・ディベロップメントについて】</b></p> <p>① 実力と発信力を備えた学生を育てるためにも、教員の授業力を更に磨くことも重要である。</p>	<p><b>① ファカルティ・ディベロップメントへの取組</b></p> <p>教員の教育能力の向上については、ファカルティ・ディベロップメント委員会において、新任・転任教員等研修会、FD 講演会・セミナーの開催等全学的な FD 活動を行う一方で、教員の英語による教授力強化のために海外から講師を招いた研修会開催、その他各部局においても独自の FD 活動を行っている。</p> <p>平成 25 年度後学期からは、優れた授業実践に学ぶことを主眼に置いた組織的な授業方法の改善を目指して、授業参観を実施する。</p>
<p><b>【特徴的な研究の推進について】</b></p> <p>① 研究は項目を絞り、熊本大学の特徴を生かした分野を磨いていきつつ、その時代に応じた新たな技術開発を進めていく事が重要である。</p> <p>② 地方の総合大学が果たす</p>	<p><b>①～② 研究力調査・分析への取組</b></p> <p>研究推進会議において研究分析ツールの導入を決定し、客観的かつ正確なデータに基づく戦略的な研究内容等の分析を開始した。</p> <p>具体的には、エルゼビア社の SciVal Experts (サイバル・エキスパート) を用いて、本学に所属する全研究者の研究活動や業績を正確に把握し、タイムリーに更新することで、専門家を特定し、学内外での共同研究の促進等が期待される。また、同社の SciVal Spotlight (サイバル・スポットライト) の活用により、本学研究者の研究論文を共引用関係から分析し、研究機関が世界</p>

<p>べき役割として、熊本大学が何を特徴とするのか明確にすべきである。</p>	<p>と比べて強みを有する研究領域を可視化するとともに、本学の研究者が各ジャーナル誌に掲載（共著を含む）された論文を検索、集積してそのデータを戦略的に分析して、本学の強みや今後強化すべき点を明らかにすることで、より効果的な研究力向上のための対策が可能となった。</p> <p>さらに、トムソン・ロイター社のデータベースシステム Web of Science を導入したことにより、本学の研究業績を他の機関、世界、分野別のベンチマークと比較し、世界の約 3,250 以上の主要大学・研究機関における学術論文の出版数や被引用数などの研究パフォーマンスをまとめ、ウェブ上で統計データとして活用するとともに、同社の Incites -Global Comparison(GC)- (インサイト) で、世界レベルでの分野ごとの研究動向、引用動向を提供するデータベースを閲覧することにより、研究評価ツールとして本学の研究力の調査及び強化に取り組んでいる。</p>
<p><b>【国際化について】</b></p> <p>① 国際的に通用する人材の必要性を感じている。日本人の内向き思考は、島国という地理的な面もあるが、語学力の乏しさも大きな要因ではなかろうか。</p>	<p><b>①-1 グローバル人材育成への取組</b></p> <p>グローバル化の加速する社会において活躍できる人材育成の重要性が増していることを受け、学生の英語運用能力の強化を図ること、また、従来のリベラルアーツとしての英語教育にとどまらず、新たな英語教育を検討するための基礎教育とするため、大学の経費により、平成 25 年度学部入学生から「TOEIC-IP テスト」を入学当初及び 2 年次末の 2 回実施することを決定した。</p> <p>また、個別の学内組織での取り組みとしては、国際化推進センターにおいて学生の海外派遣促進のため、TOEFL 講座を平成 19 年度より継続して実施している。薬学部でも別途同様の講座が開催されている。工学部では正課に加え、平成 23 年度後期よりイブニング・イングリッシュ・クラスを開設してネイティブ講師による英会話中心の授業を行い、より実践力のある学生の育成に取り組んでいる。平成 24 年度は前期、後期を合わせて 80 名程度が受講している。大学院入試については、自然科学研究科では平成 22 年度入学より、医学教育部では平成 25 年度入学より、英語として TOEFL および TOEIC 等の外部英語試験の利用を導入している。</p> <p>さらに、全学の検討組織としてグローバル人材育成ワーキンググループを平成 24 年度に立ち上げ、国際的に通用する人材育成にかかる方向性について検討を開始し、あわせて学内の国際環境の整備促進に努めている。</p> <p><b>①-2 国立六大学連携による国際化推進</b></p> <p>共同学生交流プログラムや海外の有力大学連合との交流推進など、国際的活動の具体的な連携・協力を推進するために、平成 25 年 3 月に国立六大学国際連携機構(千葉、新潟、金沢、岡山、長崎及</p>

	び本学)を設置した。
<p><b>【情報発信について】</b></p> <p>① 教育や研究の成果を社会に対して発信していくことが重要である。</p> <p>② 永青文庫研究センターの成果等を社会に対して発信すると、大学の理解度、認知度が上がるのではない。</p>	<p><b>① 教育研究成果の情報発信</b></p> <p>教育や研究の成果については、県内の報道各社へのプレスリリースに加え、平成 24 年度から「KUMADAI 不燃マグネシウム合金」など特に顕著な研究成果については、東京での記者発表を行うことにより、全国的な発信を行い、全国各紙に掲載された。</p> <p>また報道された画期的な研究成果、学会等での受賞等はHPにトピックスとして掲載することとした。</p> <p>『熊大通信』や『WEBマガジン「熊大なう。」』においては、引き続き教育や研究の成果を取り上げ、本学のタイムリーな情報を社会に発信しており、『熊大通信』で連載している「研究室探訪」の記事について、より情報に触れやすくするため、本学HPの「研究」ページからも見られるよう工夫した。</p> <p>平成 24 年度は、高校生等を対象に熊本大学の卒業生等の活躍を紹介する『熊大通信（特別号）』『熊大人』を発行し、オープンキャンパス開催時を中心に配布した。</p> <p>さらに、平成 25 年度は学術研究成果の公開を推進するための経費を拡充した。</p> <p><b>② 永青文庫研究センター研究成果の情報発信</b></p> <p>永青文庫研究センターでは、研究成果として『永青文庫叢書 細川家文書』を刊行し、この成果によって細川家文書が国の重要文化財（美術工芸品）に指定される大きな要因となった。</p> <p>また、展覧会・シンポジウムの開催や、新聞連載記事・テレビ番組制作への協力など、以下のような取組により、研究成果の社会への還元努めている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○熊本県立美術館展覧会の共催</li> <li>○熊本日日新聞連載、執筆、編集、監修等に協力</li> <li>○民放テレビ局特別企画番組の制作に全面協力</li> <li>○市民参加型の「領国地域社会論シンポジウム」（平成 25 年 11 月 30・12 月 1 日開催予定）、毎年の「貴重資料展」「永青文庫セミナー」の図書館との共催</li> </ul> <p>なお、その他、永青文庫研究センターのスタッフは、市民等を対象とした講演等を毎年あわせて 20 本程度行い、上記を含むセンターの各種事業についての情報も、センターHP を通じて逐一発信している。</p>